

Check

今月の栽培ポイント

7月

営農情報



詳しくはお近くの下記事業所までお問い合わせください。

東尾道営農センター ☎0848-56-1231
尾道北営農センター ☎0848-29-9611
向島営農センター ☎0848-44-2106
因島営農センター ☎0845-25-6161
世羅営農センター ☎0847-25-5029

浦崎支店 ☎0848-73-3311
御調支店 ☎0848-76-2242
甲山支店 ☎0847-25-5035
世羅西支店 ☎0847-37-7100
東生口出張所 ☎0845-28-0211

水稲

【水管理】

つきあかりやコシヒカリ・あきさかりの極早生・早生品種については、7月下旬から8月上旬にかけて、中生以降の品種については8月上旬から下旬にかけて出穂期を迎えます。

出穂の前段階にあたる幼穂形成期(出穂24日前)〜出穂後の開花期は、最も水が必要な時期ですのでポイントをおさえた適切な管理をしましょう。

・出穂後5〜15日は最も高温障害に対す

る感受性が高くなります。出穂前後20日、気温が高いようならかけ流しを行う。その後は、間断かんがい度適度に酸素を供給し、根の力を落とさないように心がけましょう。

・落水は出穂後30日頃(出穂日からの積算温度1,100℃)を目安としますが、落水後、高温・乾燥が続く場合は、走り水等を行いましょう。早期落水による品質低下には十分注意してください。

【病害虫】

◆紋枯病

高温で発生しやすい、湿度が高くなると病気が広がりやすくなります(侵入最適温度30〜32℃、湿度96%)。特に窒素過多の場合は被害が大きくなります。

紋枯病の菌は土の中で越冬しますので、前年に発生した圃場では、本年度も発生する確率が高いので注意が必要です。

特に注意が必要な圃場は

- ・施肥が多く大株になった圃場
- ・一株の植付け本数が多いイネ
- ・密植した圃場

です。出穂前の基幹防除だけではなく定期的に圃場を見てまわり、株の中や株元に発生が確認されたら「バリダシン粉剤」等で随時防除を行ってください。

◆いもち病

夏季の低温・長雨・日照不足の環境で発生しやすくなります。紋枯病と同様に、

窒素過多の場合は被害が大きくなります。葉いもちに対する薬剤防除は発生初期ほど効果が高くなります。

穂いもちの発生は、直接収量に影響を及ぼすので、予防散布として、出穂前後の基幹防除を徹底してください。



▲葉いもち病斑

◆カメムシ類

令和6年度において、県内全域に「斑点米カメムシ類」に関する注意報が発表されました。乳熟期の吸汁の害が多く斑点米として農産物検査で問題となる害虫です。適正な管理を心がけましょう。

また、稲穂のみならず穂軸や葉を加害するカメムシも確認されており、定期的な圃場確認と定期防除・周辺環境の整備を徹底してください。

対策としては

- ・圃場周辺の適期草刈り
- ・出穂期〜乳熟期にかけての防除が基本です。出穂期に使用する「スターフル粒剤」は粉剤より長期間効果がありません。

畦畔等の草刈り時期は、水稲の出穂開

花時期の少なくとも2週間前までに終了するようにしましょう。穂ばらみ期以降の草刈りは、カメムシ類を水田に追い込むことになるので行わないようにしましょう。



▲斑点米

◆ウンカ類

トビイロウンカは偏西風によって日本に飛来し、坪枯れによる大きな被害を及ぼします。

年によって飛来数やタイミングが異なるため早期予測が困難であることから、県が発表する最新の予測情報を常に確認する必要があります。

トビイロウンカ飛来に関する情報が発表され次第、各営農センター窓口にご注意喚起の案内を掲示いたしますので、ご確認ください。

その他病害虫に対する農業・時期等は「稲作暦」を参考にしてください。また、発生する病害虫はその年の天候に大きく左右されるので、病害虫に対する情報には十分注意してください。

柑橘

7月から8月はサビダニが多発しやすい時期です。サビダニは被害が見え始めるからの薬剤散布では手遅れになる場合が多いため、発生が見られない場合も、予防的に薬剤を散布しましょう。

【中晩柑類の仕上げ摘果】

本年度は着果量が多い園地が多く、小玉が心配されます。傷果や小玉果を中心に適正葉果比まで摘果します。仕上げ摘果が徹底出来ないと、収穫作業や家庭選別作業が大変になるので注意しましょう。仕上げ摘果時の留意事項

- ① 適正葉果比(表1)
- ② 肥大基準(表2)

表1：摘果基準

品種	残す果実	落とす果実	その他 落とす果実	最終葉果比
ネーブル	5～6枚の 総状有葉果 の2番果	傷 果、 小玉果、 内成り、 裾成り	直花果、 扁平果、 へそ大果	80～100
ハ 朔	5～8枚の 単性有葉果		直花果、 腰高果	80～100
デコボン	5枚以上の 単性有葉果		へそ大果、 扁平果、 遅れ花	100
は る み			極端な腰高	80
清 見			天成り	80～100
は る か		天成り	80～100	

表2：7月30日時点で収穫時に1以上になる果実横径

品 種	横径	備考
ハ 朔	48mm	
甘 夏	50mm	
ネーブル	40mm	
デコボン	48mm	(2 L)
しらぬひ	37mm	
は る か	37mm	
レ モ ン	34mm	(年内M)

- ③ 病害虫被害の有無
- ④ しらぬひの扁平・変形果

【中晩柑類の灌水・保水対策】

中晩柑類は大玉生産が高単価のカギとなります。果実肥大促進目的で梅雨明け後は、土壌を乾かさないうように早めに灌水しましょう。梅雨明け後、10日以上降雨が無い場合、10 a 当たり20～30mmの灌水をしましょう。また、灌水施設のない園地では、ホース灌水の場合、1樹 40 L以上、かん注機の場合、1樹10 L以上(計20 L以上)実施しましょう。また、保水対策もあわせて実施しましょう。過乾燥状態で一度に多量の灌水を実施すると裂果が発生します。定期的な灌水が重要です。

◆しらぬひ

しらぬひの果皮障害は、夏秋季の乾燥が要因の一つとなります。

しらぬひの減酸は、8月から11月までほぼ一定量しか減酸しません。クエン酸ピークの8月の酸を下げるのが、食味の良い果実生産につながります。

◆はるみ

はるみは夏秋季の乾燥により酸高になり食味が悪くなります。また、夏場の乾燥により次年度の着花が著しく減少します。灌水を徹底しましょう。

◆ハ朔

乾燥により、ホウ素の吸収が抑制されヤニ果が発生します。灌水を徹底しましょう。



▲大きい麦わら帽子の範囲に約3個着果

【みかんの品質向上】

糖度の高いみかんを生産するには満開後60～100日の乾燥が重要です。中晩柑類と同じ水管理をしないと味の悪いみかんが出来ますので注意してください。また、雨の多い場合は糖度上昇を目的に次の対策を実施してください。

◆フィガロン散布

満開後60～70日、80～90日にフィガロン乳剤3,000倍とマグミーフE600倍を混用散布してください。干ば



▲しらぬひは干ばつの影響で収穫後ヤケが出やすくなります

つ時は散布しないでください。

◆タイバックマルチの被覆

梅雨明け前に被覆することにより食味の良い果実生産が可能となります。全面被覆することにより効果が高まります。

【みかんの荒もぎ摘果】

摘果を遅らせると糖度の高いみかんが出来ますが2Sでは収益になりにくいです。果実肥大を見ながら摘果の早晩を決めてください。

◆小玉傾向の樹

7月下旬から内成り裾成りを中心に荒もぎ摘果を開始してください。

◆肥大順調の樹

盆明けから摘果を開始してください。

【病害虫防除】

◆サビダニ

サビダニの被害を防止するには7月・8月・9月の薬剤散布が特に重要となります。防除暦に従い薬剤を丁寧に散布しましょう。園内の果実が成っていない樹にもサビダニは寄生していますので防除が必要です。

サビダニの初期被害果は茶色粉がふいたように見えます。



▲サビダニ初期被害果

◆ミカンハダニ

気温が低下するに従い発生が多くなり

ます。多発前に薬剤散布しましょう。

◆黒点病

散布間隔は累積降雨250mmもしくは散布後30日です。遅れないように散布しましょう。アビオンEを混用すると薬剤の残効が高まります。(8月は薬害事例があるので使用しないでください)

◆ヤノネカイガラムシ

8月が2回目の防除適期となります。散布ムラのないよう薬剤を散布しましょう。

【日焼け対策】

陽光面に紙のガムテープを貼るか白色サンテなどを利用し日焼け防止を図りましょう。日焼けの省力化をはかるのにホワイトコート50倍の散布も有効です。(選果機の水洗ラインを通らない品種は汚れがとれないので使用しないでください)



▲日焼け果



▲ホワイトコート散布果実

【除草】

雑草と養水分の競合を防ぐために実施します。除草剤の特徴をよく理解し使用しましょう。グリホサート系除草剤の連用はツユクサやスギナの占有率が高くなるので注意しましょう。

梅雨明け頃にシンバー水和剤とバスターを混用散布すると長期間、雑草の発生を抑制できます。詳しい使用方法は担当技師へお問合せください。

落葉果樹

ぶどう

【ハウス栽培デラウェア】

◆裂果対策

裂果対策は万全ですか？排水溝や樹冠下のマルチング等を行ってください。

◆樹勢回復

収穫終了後すぐに、速効性の肥料を施用して灌水を行い、樹勢の回復を図ってください。(S604を20kg/10a)

また、病害虫防除を行い、葉を健全に保ちましょう。

灌水は、収穫終了後も定期的に行ってください。

【ハウス栽培ピオーネ・露地栽培デラウェア】

◆収穫

いよいよ収穫期です。収穫は、果実温度の低い早朝に行ってください。

出荷される方は、酸抜けに注意して適熟果の収穫を心がけ、商品として責任の持てる果実を出荷しましょう。

◆水分管理

着色期から収穫期にかけては、やや乾燥気味に管理を行ってください。

◆裂果対策

裂果対策は万全ですか？

排水溝や樹冠下のマルチング等を行ってください。

【露地栽培ピオーネ】

トンネルのビニールは、温度が上がらず着色不良の原因になります。袋掛け後早めに除去して防除をしてください。

着色が始まってからは、やや乾燥気味に管理を行ってください。

大粒系のぶどうではべト病に気を付けてください。発生が見られた場合は、早めに防除してください。

もも

収穫が終了した樹は、果実生産に栄養を消耗しており弱っています。礼肥を施用し(硝酸入り化成肥料S604を20kg/10a)、灌水もしっかり行い、樹勢の回復を図りましょう。

次年度の貯蔵養分を蓄えるために、葉を樹にできるだけ長くつけておけるよう防除を徹底し、葉を大切にしましょう。

乾燥が続く場合は灌水を行いましょう。

◆注意する病害虫

シンクイムシ類、カイガラムシ類、さび病



▲さび病

なし

◆新梢管理

徒長枝は日当たりを考慮して込み合うようなら、誘引やねん枝を行ってください。

樹勢が弱っている樹の夏季剪定は、樹の内側の込み合った部分を整理する程度にしてください。葉数が少なくなると光合成量が少なくなり、樹にとっては致命的なダメージとなります。

◆水分管理

なしは水分が多いほど大きくなります。乾燥させないように定期的にしかり灌水を行ってください。

いちじく

◆新梢管理

枝が密生して樹冠内部が混みすぎていると、葉による傷果、日照不足による着色不良が増えます。園内を見回り、枝が混みすぎている所は思い切って枝抜きを行いましょう。

◆灌水

いちじくは夏季の水管理によって、果実の肥大に大きく影響します。梅雨明け

後は、高温乾燥が続く、ヤケ熟果の原因にもなりますので、晴天が続くようであれば灌水を行いましょう。

◆収穫

いよいよ収穫が始まります。果実温度の低い早朝に収穫しましょう。収穫する際は、果実を傷つけないように丁寧に採りましょう。

かき

◆摘果

奇形果・変形果・病害虫被害果・小玉果を摘果してください。

◆水分管理

柿は乾燥に弱いので、乾燥させないように定期的に灌水を行い、果実肥大を図ってください。

家庭菜園

今年は平年に比べ、3日程遅い梅雨入りとなりました。

梅雨入り後は定期的な雨が期待できますが、晴れた日が続くようなら灌水するなど乾燥対策が必要となります。

中国地方の梅雨明けは、例年だと7月19日ごろです。梅雨明け後は高温や乾燥に注意しましょう。この時期は急激な降雨や日照りによって、環境の変化が大き

く、作物にストレスを与えます。株元にもみ殻などを敷いてやると乾燥防止、地温上昇の抑制などの効果が期待できます。また病気の原因となる泥跳ねも軽減できます。

【夏季の管理】

トマトやピーマンなどは夏野菜という分類から暑さに強いイメージがありますが、実際の生育適温は概ね20～28℃となつています。近年の夏は気温が30℃を超えるのが当たり前で夏野菜にとっても厳しい環境と言わざるを得ません。次に挙げる項目を参考に、少しでも快適な環境を整えて夏を乗り越えさせましょう。

◆整枝・誘引

気温が上がるにつれ生育も旺盛になります。株のサイズに合わせて、支柱やネットに誘引し直しましょう。また、込み入った部分は間引いて風通しを良くしてください。

樹勢が弱つてくると実の付きが悪くなり、果実の太りも悪くなります。そのような場合は一度実を全て取り除き樹勢の回復に努めます。

◆灌水・追肥

収穫期に入った野菜は、水の要求量も多くなっています。先月よりも水量を増やして灌水しましょう。

早朝の灌水が難しい場合は、夕方涼しくなってから灌水してください。

追肥については、少量を定期的(10日～2週間おき)に施用して株が弱らないよう管理します。株が弱った場合は、速効性のある液肥や化成肥料を使って、樹勢の回復に努めましょう。

◆果実に現れる異常について

果実には様々な異常が現れます。代表的な症状をいくつか紹介しますので、参考にしてください。

・窓あき果

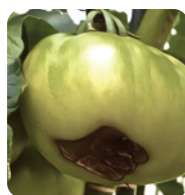
花芽分化・発育過程で5～7℃の低温に遭遇すると多発する。多水分、多肥で助長される。



▲窓あき果

・尻腐れ果

カルシウム不足、灌水不足で発生しやすい。



▲尻腐れ果

・曲がり果

乾燥、日照不足、着果数が多くて養分の競合の多いときに発生する。



▲曲がり果

・つやなし果

水不足が原因で発生しやすい。



▲つやなし果

◆病害虫対策

梅雨が明けて晴れる日が多くなるにつれ、害虫が増えてきます。家庭菜園では、なるべく農薬を使いたくない方が多いと思います。

手間はかかりますが、補殺して密度を減らすのも大切です。葉裏などを観察すると卵が見つかることもありますので、これも処理しましょう。

病害の予防については、上でも挙げたもみ殻や、通気性の確保が効果的です。また、人間と同じで元気な個体は病気にも強いので、株の勢いを維持するのが一番の予防になります。

大変暑い時期の作業となります。熱中症には充分注意し、こまめな休憩と水分補給を心がけましょう。